

比 恵 63

— 比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一六九集

一一〇一二

福岡市教育委員会

2012

福岡市教育委員会

比恵
—比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告—

比 恵 63

– 比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告 –



遺跡略号 HIE
調査番号 1016(121次)
1107(124次)

2 0 1 2

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため、市内各所には、歴史的遺産が数多く残っています。本市は、これらを後世に残し伝え、市民の皆さんに活用していただくために、文化財の保護と活用に取り組んでいるところであります。

福岡市教育委員会では、こうした取り組みの一環として、開発にともないやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存につとめています。

本書は、平成22・23年度に発掘調査を実施した、比恵遺跡群第121・124次調査の成果を報告するものです。本調査では、弥生時代から中世を中心とした、水利にかかわる遺構等が発見されました。これらは、当時の博多区博多駅南の歴史を知る上で貴重な資料となるものです。本書が、市民の皆さんの文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者のみなさまをはじめとして、多くの方々のご理解とご協力を賜りました。ここに心からの謝意を表します。

平成23年3月16日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例　言

1. 本書は、民間開発事業にさきだって、平成22・23年度に福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、比恵遺跡群第121・124次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書の作成は、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課の下記担当者が実施した。
第121次調査（調査番号1016）　：　松尾奈緒子
第124次調査（調査番号1107）　：　藏富士 寛
3. 方位はすべて磁北であり、真北より $6^{\circ} 50'$ 西偏している。座標は、日本測地系（第Ⅱ系）を用いている。
4. 遺構は、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、性格不明遺構をSXと略号化して記述した。
5. 本書に掲載した遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は藏富士・松尾・福菌美由紀・大庭友子が行った。
ただし、第14図6・7の実測は福岡市教育委員会吉留秀敏氏によるものであり、氏のご教示を得た。
6. 本書にかかる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて保管・公開される予定である。

本文目次

第1章 比恵遺跡群の地理的・歴史的環境 (松尾奈緒子)	1
第2章 比恵遺跡群第121次調査の記録 (松尾)	3
1. 調査の経過と体制	3
2. 発掘調査の記録	4
3. まとめ	14
第3章 比恵遺跡群第124次調査の記録 (藏富士 寛)	15
1. 調査の経過と体制	15
2. 発掘調査の記録	16
3. まとめ	20

挿図目次

第1章

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 周辺調査地点	2
第3図 第121・124次調査区位置図	2

第2章 (121次)

第4図 SD01土層断面図	4
第5図 遺構配置図・調査区東壁土層断面図	5
第6図 SD01出土遺物実測図①	6
第7図 SD01出土遺物実測図②	7
第8図 SD01出土遺物実測図③	8
第9図 SX02・SD03平面図・断面図・出土遺物実測図	9
第10図 SD13・24平面図・断面図	10
第11図 SX07平面図・断面図	11
第12図 SX23断面図	11
第13図 北トレンチ南東壁土層断面図・出土遺物実測図	13
第14図 そのほかの出土遺物実測図	14

第3章 (124次)

第15図 調査区位置図	16
第16図 遺構配置図	17
第17図 杭出土状況実測図	18
第18図 土層図	19
第19図 出土遺物実測図	20

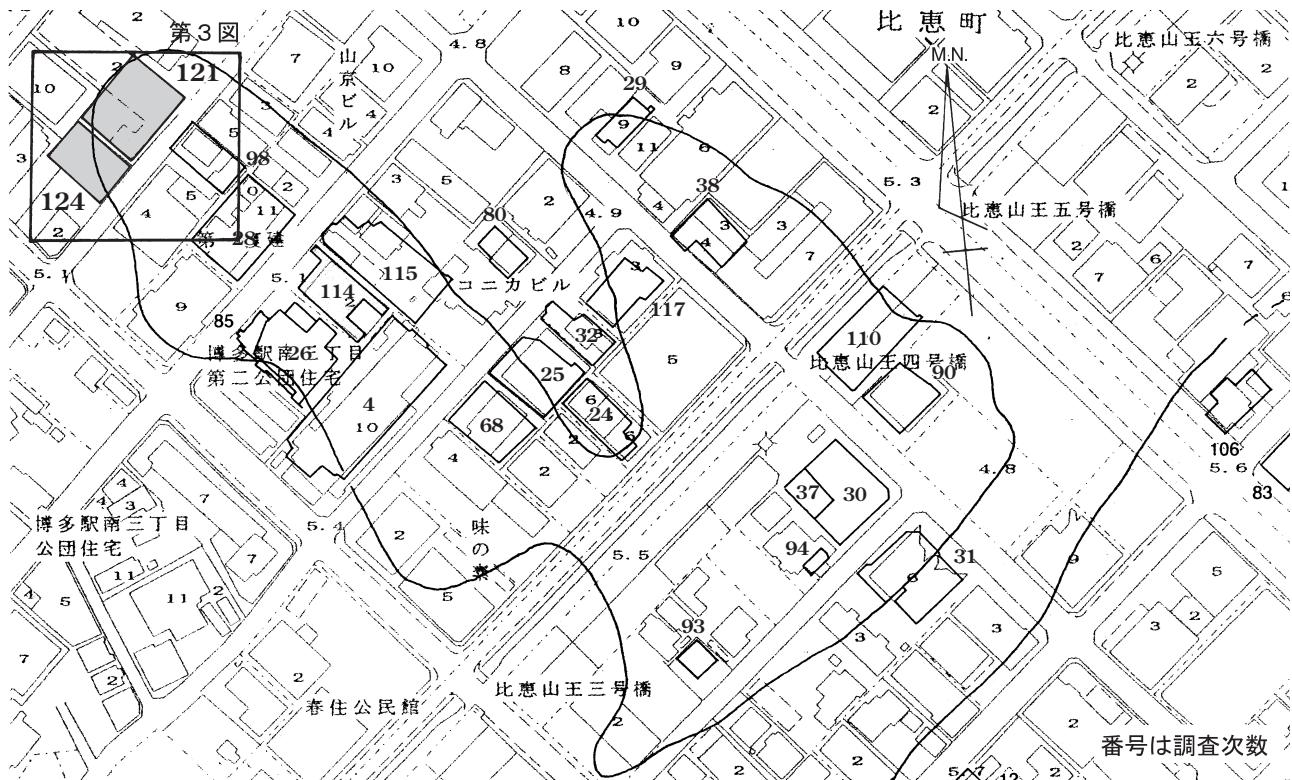
第1章 比恵遺跡群の地理的・歴史的環境

比恵遺跡群は、福岡平野の中央部に位置し、北流する那珂川・御笠川に挟まれた洪積台地上に立地する集落遺跡である（第1図）。御笠川と那珂川の間には、Aso4火碎流堆積物を基盤とする中位段丘Ⅱ面が那珂川町安徳から福岡市博多区博多駅南まで福岡平野を縦断するように南北に長く広がっており、中小河川によって開析をうけた結果、多くの島状台地が形成され、弥生時代以来、福岡平野の人々の生活の場となってきた。比恵遺跡群はこのような島状台地群の最北にあり、南側には那珂遺跡群、五十川遺跡、井尻B遺跡、須玖・岡本遺跡群が展開し、比恵遺跡群を含めたこれらの遺跡群は、福岡平野における中心的な集落遺跡として重要視されている。

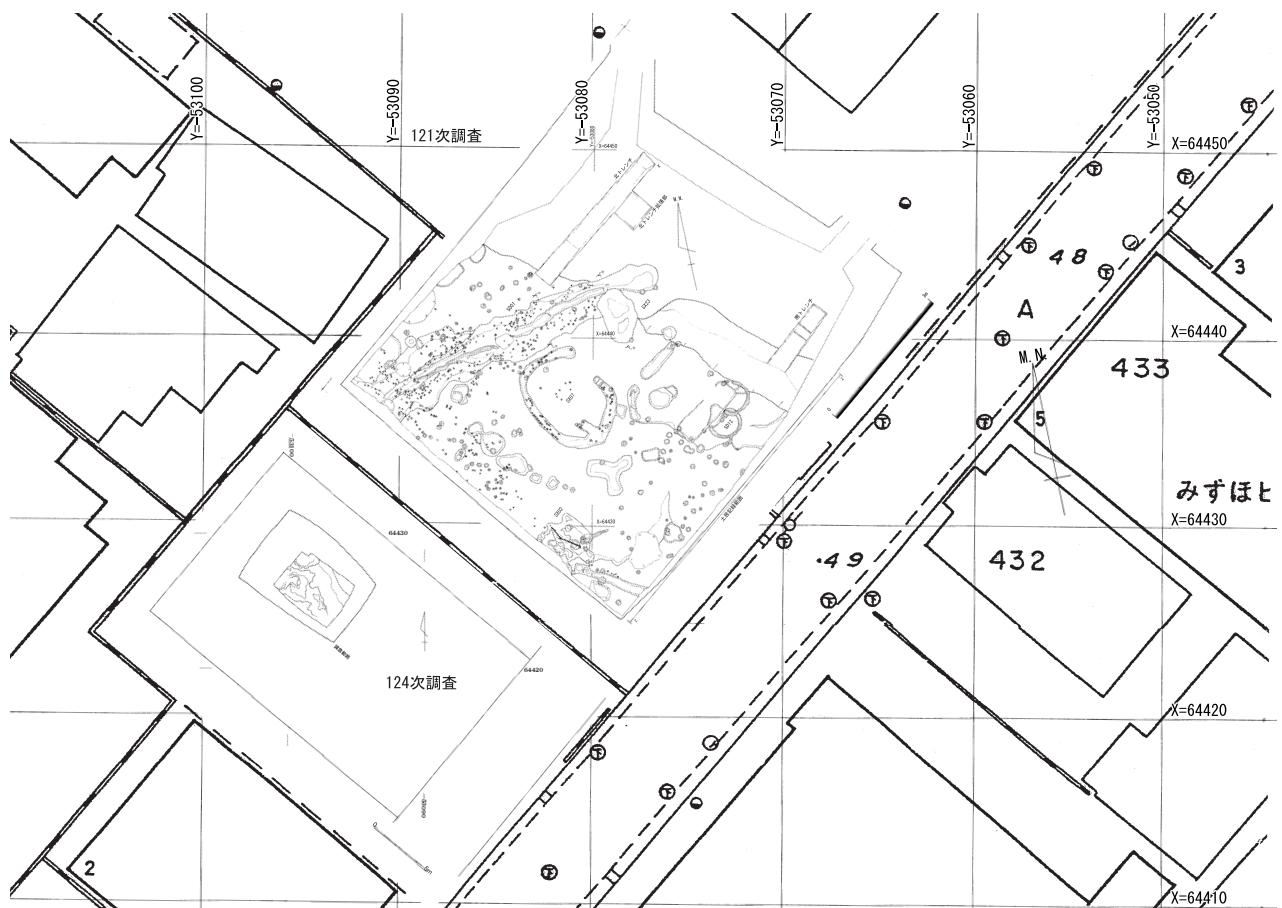
比恵遺跡群は、周囲を沖積低地に囲まれた南北約1000m、東西約900mの範囲に展開する南・西・北の3つの島状台地から構成されており、第121・124次調査地点は、比恵遺跡群の北台地に位置する（第2図）。3つの島状台地は、南台地中央部が最も高く、西方・北方・東方の低位部に向かって低く傾斜する地形をなし、第121・124次調査地点のある北台地北端部では、南台地の最高所と比べるとその比高差は約2m以上あったと推定されている。このような台地縁辺の地形を反映して、北台地には、弥生時代前期中頃～中期初頭を中心とした、竪穴住居・貯蔵穴・貯木遺構などから構成される集落域が広がっていたことが分かっている（第25・26・30・31・37・68・85・90・110・114・115次調査など）。その後、弥生時代中期後半になると、南台地や那珂遺跡群の遺構の消長と同様に、北台地南部の高位部を中心に竪穴住居や溝状遺構、甕棺墓が展開することがわかっている（第4・110・90・30次など）。また、古墳時代初頭～前期になると、北台地北部を中心に大小さまざまな規模の溝や水溜遺構が広がる様相が確認されており（第4・26・31・94・114・115次調査など）、生産域としての土地利用がなされていたと推測されている。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第2図 周辺調査地点 (S=1/4000)



第3図 第121・124次調査区位置図 (S=1/400)

第2章 比恵遺跡群第121次調査の記録

1. 調査の経過と体制

(1) 調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成22年4月27日、ビル建設に先立ち、福岡市博多区博多駅南3丁目地内の埋蔵文化財の有無について、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に照会文書が提出された（事前審査番号22-2-92）※。当該申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群の範囲内に位置していることから（分布地図番号36・37-0127・遺跡略号HIE）、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成22年5月12日に試掘調査を行い、地表下90cmの鳥栖ローム層上面で弥生時代の遺構を検出した。これをうけて、埋蔵文化財第1課は、この旨を申請者に回答し、その取り扱いについて協議を行った。その結果、申請面積3352m²のうち、ビル建設にともなう基礎工事によって遺構の破壊が免れない370m²について、平成22年に発掘調査、平成23年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が、平成22年7月10日から同年8月10日まで実施した（調査番号1016）。調査面積は360m²におよび、検出された弥生時代の遺構から、弥生土器・石器などを中心にコンテナ4箱分の遺物が出土した。

※ その後、申請者の名義変更が行われたため、平成22年5月18日に照会文書が再度提出された（事前審査番号22-2-146）。

(2) 調査体制

調査を実施した平成21年度および整理報告を行った平成22年度の組織は以下の通りである。

調査主体： 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括： 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫
調査第1係長 米倉秀紀

調査庶務： 埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

事前審査： 埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文

調査担当： 埋蔵文化財第2課 調査第1係 松尾奈緒子

調査作業： 相川春彦 石川洋子 上野照明 内野信代 唐島栄子 許斐託生
佐々木華子（福岡大学） 清水信也 永田とみ子 中村桂子 濱地静子
村山巳代子

整理作業： 鶴田靖子 松下伊都子 宮崎由美子 吉盛 泉 渡邊宏代 （五十音順・敬称略）

現地での発掘調査にあたっては、関係者のみなさま、地域のみなさまからご理解をいただくとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 発掘調査の記録

(1) 調査の概要 (第4図・図版1-1)

試掘調査の結果から、本調査区の北半において、比恵遺跡群北台地の丘陵部とその北方にひろがる低位部の落ち際が、北西方向から南東方向へ検出されることが、あらかじめ想定された。また、周辺の調査成果から、丘陵部では弥生時代前期の貯蔵穴などの遺構の広がりが、低位部では弥生時代前期～中期の木製品を含む包含層および水田跡の検出が想定された。

このような試掘調査および周辺の調査成果をふまえて、丘陵部では鳥栖ローム層上面を、低位部では暗灰色砂層～黒色シルト層（第13図土層1・2）の上面を遺構面と設定し、第4図土層2～5に示した近世の遺物を含む洪水層（灰褐色砂）を重機によって除去することから調査に着手した。現地表面の標高は5.14m、鳥栖ローム遺構面は標高4.05m～4.3mをはかり、南西から北東にむかって傾斜する。

表土掘削後は、まず丘陵部の遺構から人力掘削をはじめ、その後低位部において遺構の有無や下層の土層堆積状況を確認するためのトレーニング調査を人力で行った。その結果、丘陵部では、鳥栖ローム層上面において、弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられる溝（SD01）のほか、弥生時代前期と推定される円形周溝（SD13・24）、時期を特定できない遺構（SX02）および杭列などを検出することができた。しかし、調査区丘陵部は、中世以降たびたび洪水におそわれており、遺構面の上に堆積していた暗褐色耕作土（第4図土層15）のほか、SD01やSX02の上層が、このときにもたらされた灰褐色洪水砂によって削りとられていることが（第5・9図）、遺構や調査区壁面の土層観察から判明した。

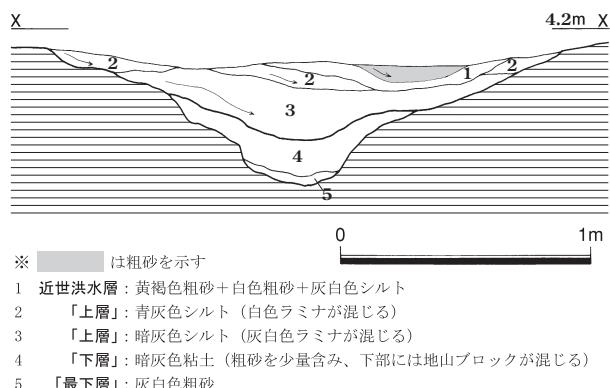
調査は、低位部において遺構が存在しないことを確認したうえで、2010年8月5日に全景撮影を行った後、2010年8月9日に重機により埋め戻しを行い、同年8月10日に発掘調査機材を撤収して調査を終了した。

(2) 台地上の遺構と遺物

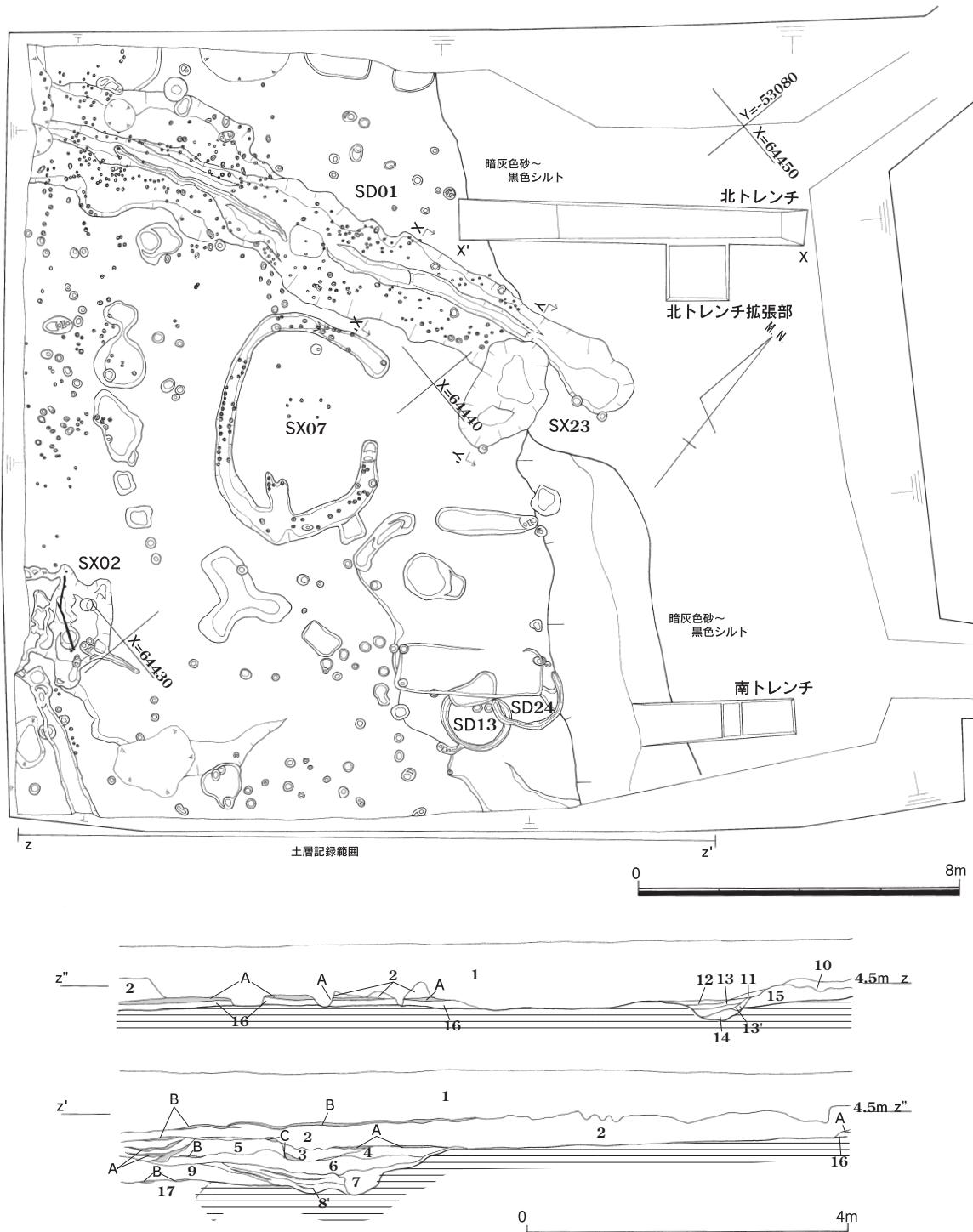
SD01 (第4・5図・図版2-1)

調査区北西部に位置する溝状遺構で、主軸を東西方向にとり、ゆるやかに弧を描く。上面は近世の洪水砂によって攪乱されていた（第5図土層1）。西端は調査区外へ続いている。全長16.5mにわたって検出できた。両側にゆるやかに傾斜するテラスをもち、断面形は台形をなす。

検出面における幅は2.1m～3.2mをはかり、検出面からの深さは0.5mをはかる。底面は西端から谷部（東端）へむかって低くなり、その差は0.2m程度である。護岸のためと推測される杭の痕跡が壁面から多数検出されたが、類似する杭の痕跡は調査区西隅の広範囲で確認されており（第4図）、SD01にともなうものであるかどうかは確実ではない。覆土の状況から流水していたと考えられる。谷部において井堰のようなものも検出されず、SD01の底面も谷部にむかって低く傾斜することから、水は台地部から谷部へ流れていた可能性が高い。下層以下から出土した遺物から、弥生時代前期末～中期初頭の遺構と考えられる。



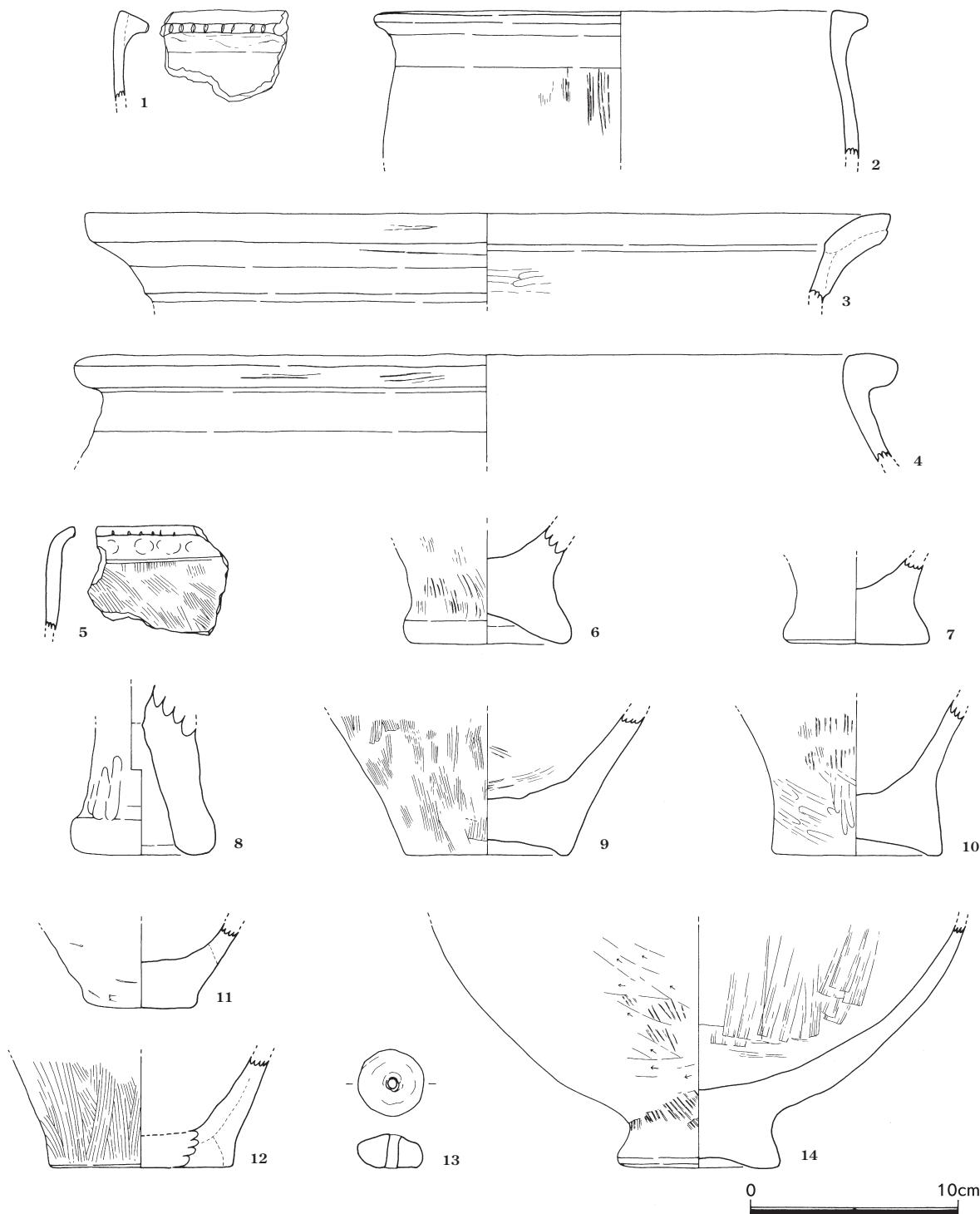
第4図 SD01土層断面図 (S=1/30)



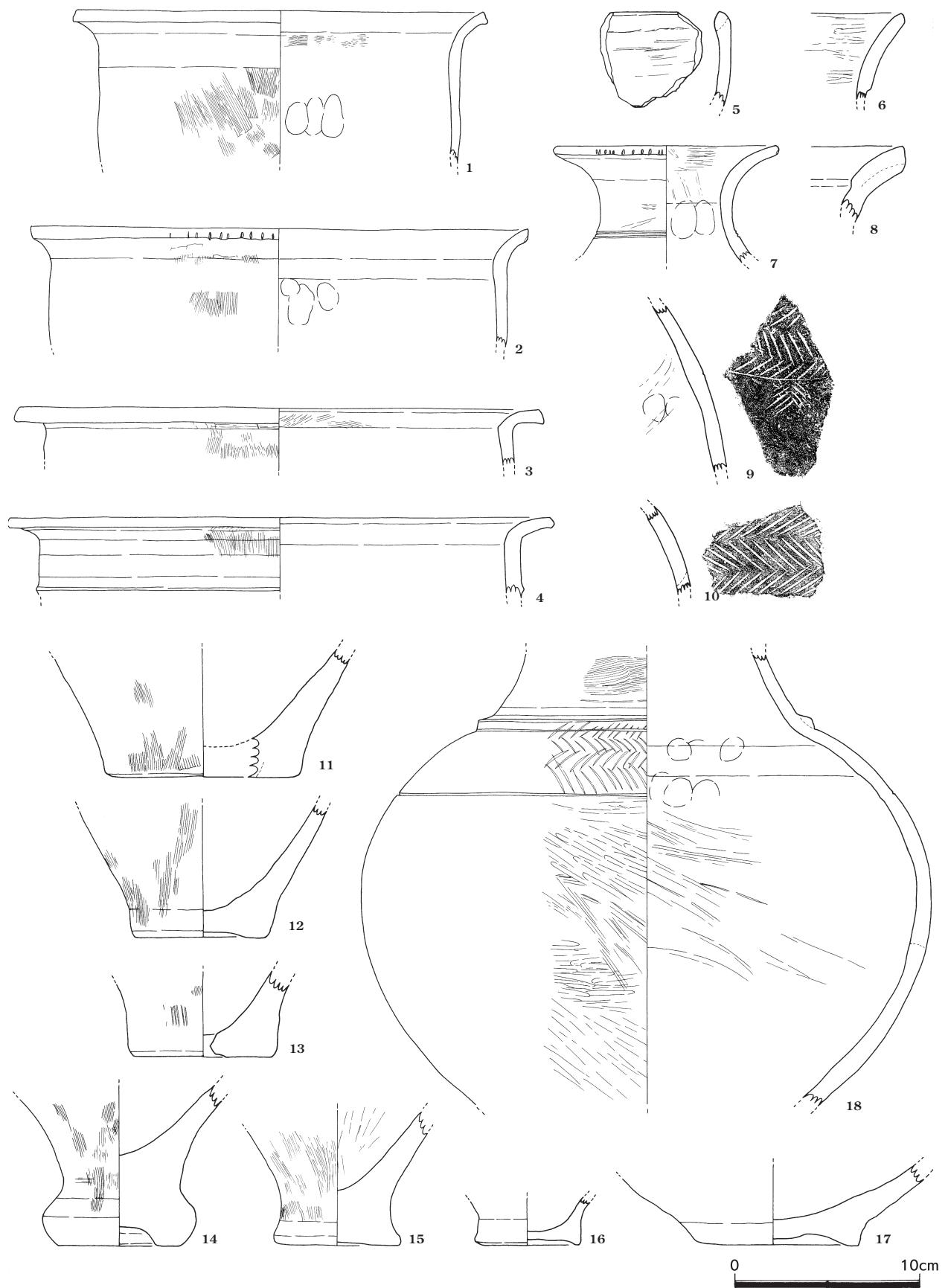
第5図 遺構配置図 (S=1/160) • 調査区東壁土層断面図 (S=1/80)

[出土遺物 (第6・7・8図)]

第6図1~10は上層から、11~14は下層から出土した。全体的に摩滅している。1・2・4・5は弥生土器甕である。1は亀の甲式か。2・4は城ノ越式で外面にはスヌが付着している。3は弥生土器壺である。外面は工具による横ナデ、内面は横ヘラミガキで仕上げられる。6・7・9・10・12は弥生土器甕底部である。6はハケ調整が外底面端まで及ばない。9の外面は丹塗される。須玖Ⅱ式か。11・14は弥生土器鉢の底部。14の外面には丹塗がのこる。13は土製紡錘車で重量は16.2gをはかる。下から上に穿孔されており、下面是焼成不良で淡灰黒色を呈する。



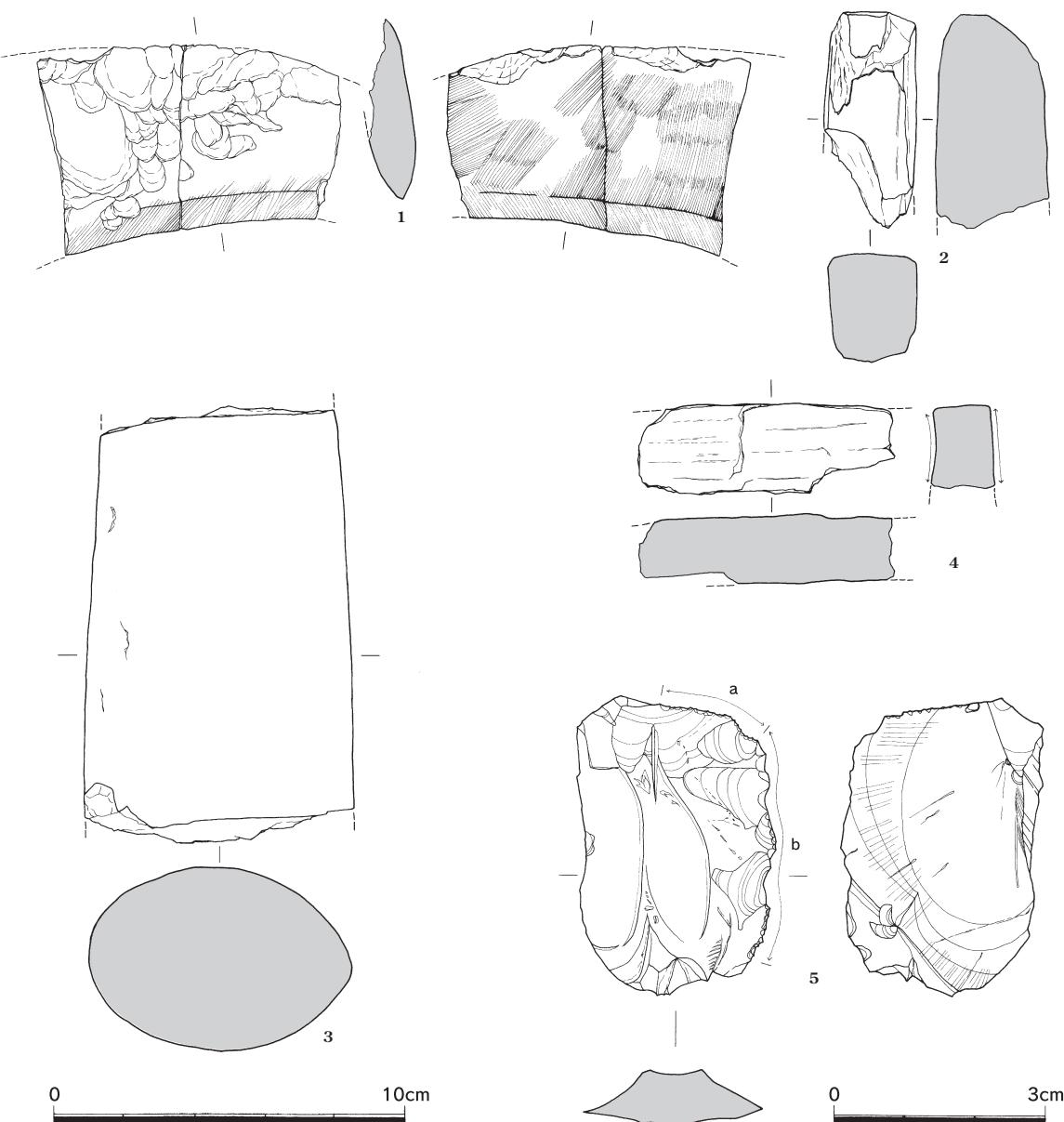
第6図 SD01出土遺物実測図① (S=1/3)



第7図 SD01出土遺物実測図② (S=1/3)

第7図1～4は弥生土器甕である。4は折衷甕である。すべて外面にススが付着する。5は口径20cm程度の内湾するタイプの弥生土器鉢である。外面は工具による横ナデで仕上げられる。6～10は弥生土器甕である。6は丹塗磨研の痕跡が残る。9・10は無軸羽状文がほどこされた胴部片である。9はタマキガイによる施文であり、文様帶の直下にある縦方向の羽状文は西部瀬戸内で多くみられる文様である。11～15は弥生土器甕底部で、12・13・15には外面にスス、内面にコゲが厚く付着している。16は弥生土器鉢底部か。17は弥生土器甕底部で外面は丹塗される。18は弥生土器甕である。胴部上半に上から下へ無軸羽状文を施文した後、その上下に沈線がほどこされている。内外面ともに暗褐色～茶褐色を呈する。

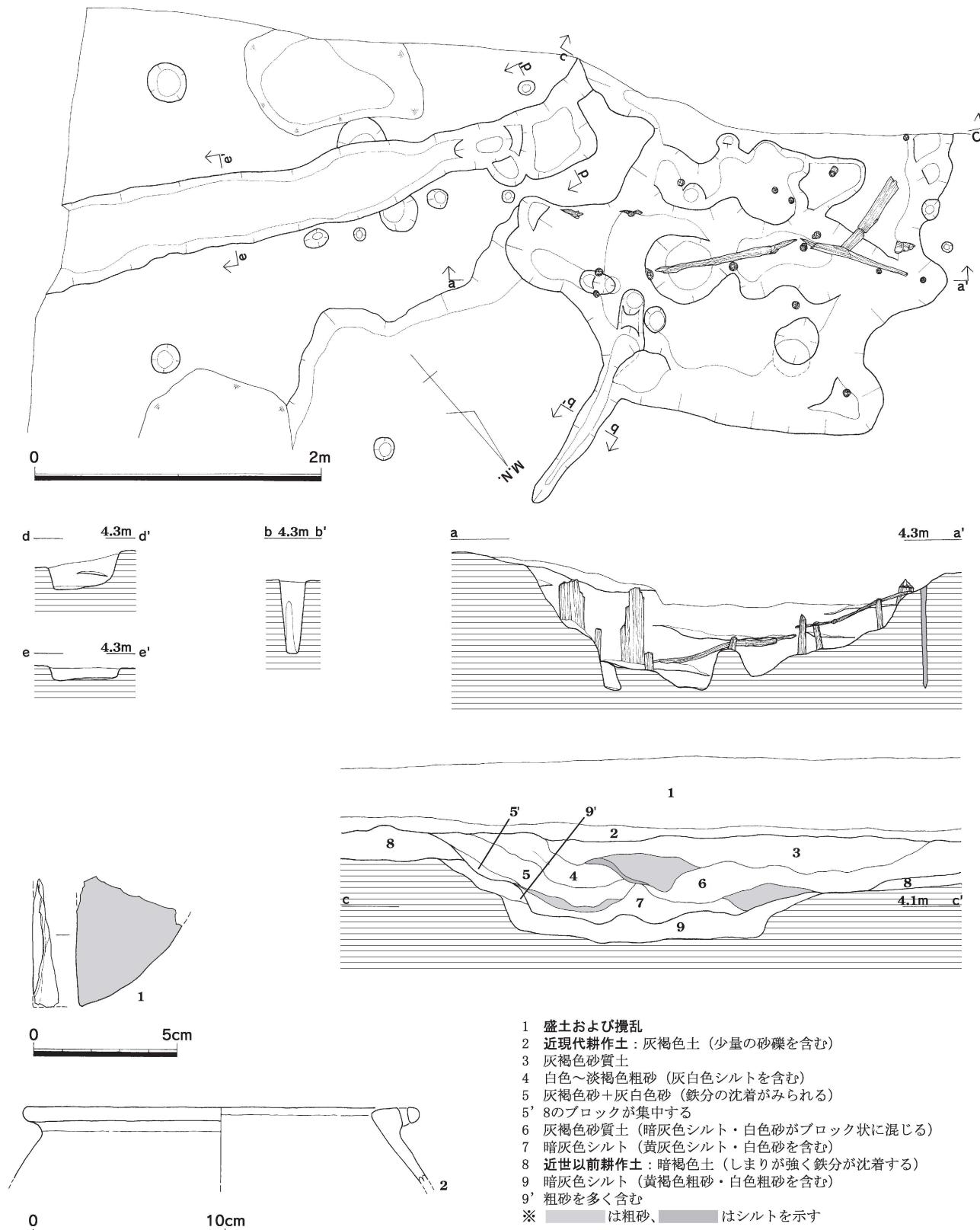
第8図1～3・5は下層から出土した。1は石鎌で、被熱により剥離している。堆積岩とおもわれるが、層利がみられず、石材は不明である。2は層灰岩製柱状片刃石斧。3は玄武岩製大型蛤刃石斧で、重量は982.08gをはかる。4は粒子の粗い砂岩製砥石である。長辺側の面のみ使用痕跡が確認できる。重量は47.07g。5は黒曜石製スクレイパー。打面を調整した後に行われた剥片剥離と、使用 (a) および二次調整 (b) との間に風化の違いがあり、二重パティナを呈する。重量は11.88gをはかる。



第8図 SD01出土遺物実測図③ (S=1/1・1/2)

SX02 (第9図・図版2-3・4)

調査区南隅に位置する遺構である。遺構の西半は調査区外へ続く。検出できた範囲では南北幅2.2m、東西長2m以上をはかる隅丸方形のプランをなすが、南側・北側ともに壁面には凹凸があり、東側には検出面からの深さが0.5mほどの細い溝状の遺構がともなう。同様に、床面の形状も一定せず凹凸が



第9図 SX02・SD03平面図・断面図 (S=1/40) ・出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

激しい。遺構の中央部は深さ約1mをはかり最も深く、西側は東側よりも0.3m程度高くテラスをなしている。最も深い中央部には、遺構を横断するように点々と、断面円形の杭やミカン割りされた材を利用した杭が設置されており、この間を渡すように加工痕跡のない細い枝状の木材が部分的に重なり合いながら検出された。

遺構の上部は近世の洪水砂によって攪乱され削りとられていた（第9図土層3～7）ため、SX02の覆土は、標高4.1m以下の下部に残った暗灰色シルト（第9図土層9・9'）および中央部の最も深いところに堆積していた粗砂を含む黒灰色粘質土である。

出土遺物が少なく時期は明確ではないが、弥生時代中期末以降、近世以前の以降であるとおもわれる。遺構の性格は不明である。しかし、台地部・谷部ともに近世以降の洪水によって削平されていること（第4図）、谷部では弥生時代前期以降の遺物が出土しないこと（後述）を考慮すると、東側にとりつく溝は、削平される以前は谷部まで延びていた可能性が想定される。仮に、最も深い中央部を横切るように並ぶ杭列とその間に渡された木材を、台地部からの流水をせき止めるものと仮定すれば、谷部にあった水田に水を供給する前に、一度水を溜めおいた遺構である可能性も考えられる。

[出土遺物（第9図）]

1は層灰岩製柱状片刃石斧、2は弥生土器短頸壺である。2は摩滅が著しい。弥生時代中期末～後期初頭のものである。

SD03（第9図・図版2-3）

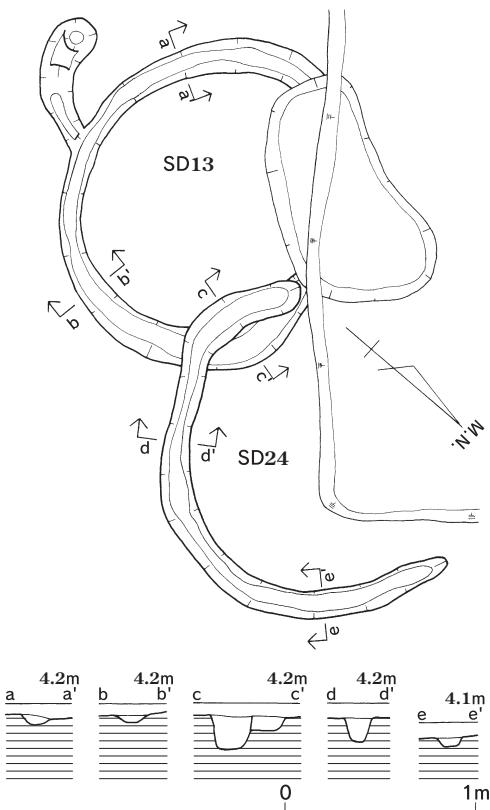
SX02にきられる溝状遺構で、調査区南隅を東西方向に横切って調査区外へと続いている。検出面の標高は約4.1mで、幅0.3m～0.5m、検出面からの深さは0.1m～0.3mをはかる。断面形は箱形をなすが、遺存状況が悪く削平前の形態はよくわからない。上面は近世の洪水砂によって攪乱されていた（第4図土層12・13・13'）。遺構の最下層に残っていた覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土であり、流水の痕跡は認められなかった。覆土や規模などは後述するSX07に類似する。

弥生土器片が少量出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。したがって、時期の詳細も不明である。

SD13・SD24（第10図・図版2-5）

調査区の東部に位置する、直径1.7m程度の円形周溝である。溝の幅は0.15m～0.2m、検出面からの深さは0.1m～0.2m程度をはかる。底面の深さは標高4m～4.1mで若干の凹凸があるが、SX07のような杭の痕跡は認められなかった。SD13の南側には湾曲する溝がとりついている。覆土はローム粒を含む暗褐色土である。

SD13から弥生土器片が少量出土したが、いずれも細片のため、図化し得ない。このため時期の詳細も不明である。



第10図 SD13・24平面図・断面図 (S=1/40)

SD13・SD24は、弥生時代前期末～中期初頭に多く確認され、家畜小屋あるいは作業場、納屋等と推定されている遺構に類似する。平面形態等や規模から、SD13・SD24は、雀居遺跡12次調査において検出されたものに近似するが、溝状遺構の底面に杭の痕跡等がなく、また、時期もしづらかめないことから、詳細は不明である。

SX07 (第11図・図版2-2)

調査区の中央部に位置する性格不明の周溝である。長軸5.7m、短軸4.3mをはかる不整橢円形のプランをなし、溝の幅は0.3m～0.6m、検出面からの深さは0.1m程度である。底面からは杭の痕跡が検出された。とくに、南東部のものは溝壁に沿って並んでいる。しかし、遺構の西側にもこのような杭の痕跡は多数検出されており、これらの杭がSX07とともにどうものかは明確ではない。覆土は灰褐色土ブロックを含む暗褐色土である。

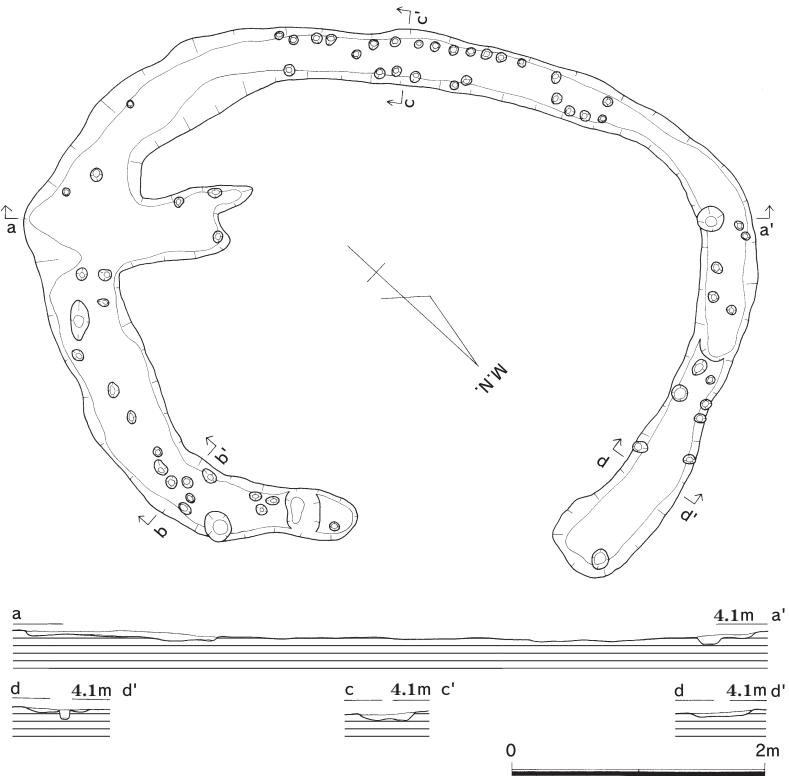
弥生土器片が出土したが、いずれも細片のため図化し得ない。

このため、時期の詳細も不明である。円形の周溝という点でSD13・SD24と類似しており、また、溝内から杭の痕跡も検出されていることから、SD13・SD24と同様の性格の遺構と考えたいが、類例と異なり規模が非常に大きいため、遺構の性格は不明である。

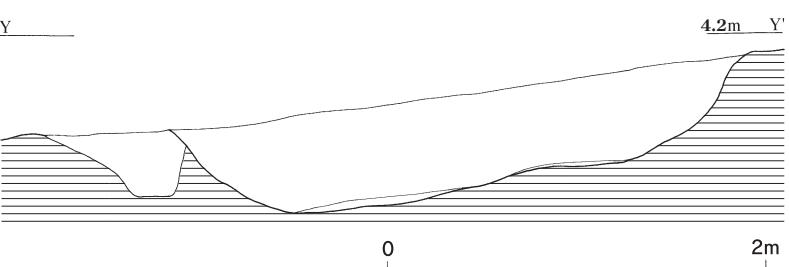
SX23 (第4・12図)

調査区中央部の谷部への落ち際に位置する土坑である。北端において、SD01を破壊して掘りこまれている。

検出面の標高は3.7m～4.1mで、長軸3.0m、短軸1.75mをはかる不



第11図 SX07平面図・断面図 (S=1/60)



第12図 SX23断面図 (S=1/40)

整橢円形のプランをなす。検出面からの深さは約0.5mで、中央部付近で比高差0.2m程度の段差をもつ。覆土は粗砂を含む暗灰色粘質土である。

台地部における遺構検出時に遺構の南半で完結する遺構として認識して掘削を終えていたが、SD01の谷部への落ち際を検討するなかで、SX23がより大きい遺構であることを確認した。このため、土層の記録をとることができなかった。

[出土遺物 (第14図2)]

2は弥生土器甕片を加工した円盤である。内面は褐色、外面は淡褐色を呈する。

(3) 低位部におけるトレンチ調査(第4・13図・図版1-3・4, 2-6・7・8)

低位部は、暗灰色砂層～黒色シルト層(第13図土層1・2)の上面を遺構面とし(第4図)、遺物がほとんど出土しない洪水砂層(第4図土層6～9)を重機によって除去して検出した。遺構面上面では遺構がみられなかつたため、幅1mの「北トレンチ」「南トレンチ」を設定し(第4図)、土層堆積状況と遺構の有無を確認した(図版1-3・4)。

北トレンチでは、黒色シルト層(第13図土層2)以下の土層堆積を確認し、台地落ち際から1.3m～1.5m程度の標高2.8m～3.0mにおいて鳥栖ローム層に至る(図版2-6～8)。トレンチ底面で検出した鳥栖ローム層は、南西から北東にむかって比高差約0.2mをもって緩やかに低くなっていく。黒色シルト層には弥生時代前期末～中期初頭の土器が少量混じり、この上面において、暗灰色砂層(第13図土層1)におおわれた状態の足跡が検出された(図版1-2)。また、最下層の暗黄褐色土(第13図土層4・5)中に杭の痕跡が確認され、同様の痕跡は基盤の鳥栖ローム層上面でも検出された(図版2-8)。

このような状況は、南側のトレンチにおいてもみられるが、最下層で検出された杭の痕跡は北側より不明瞭で数も少ない。なお、低位部の南東側では近世以降の洪水にともなう灰褐色砂によって、黒色シルト層が削られていることから、南側で確認された落ち際の現在の地形は弥生時代当時に比べて西側に削られていると推測される。

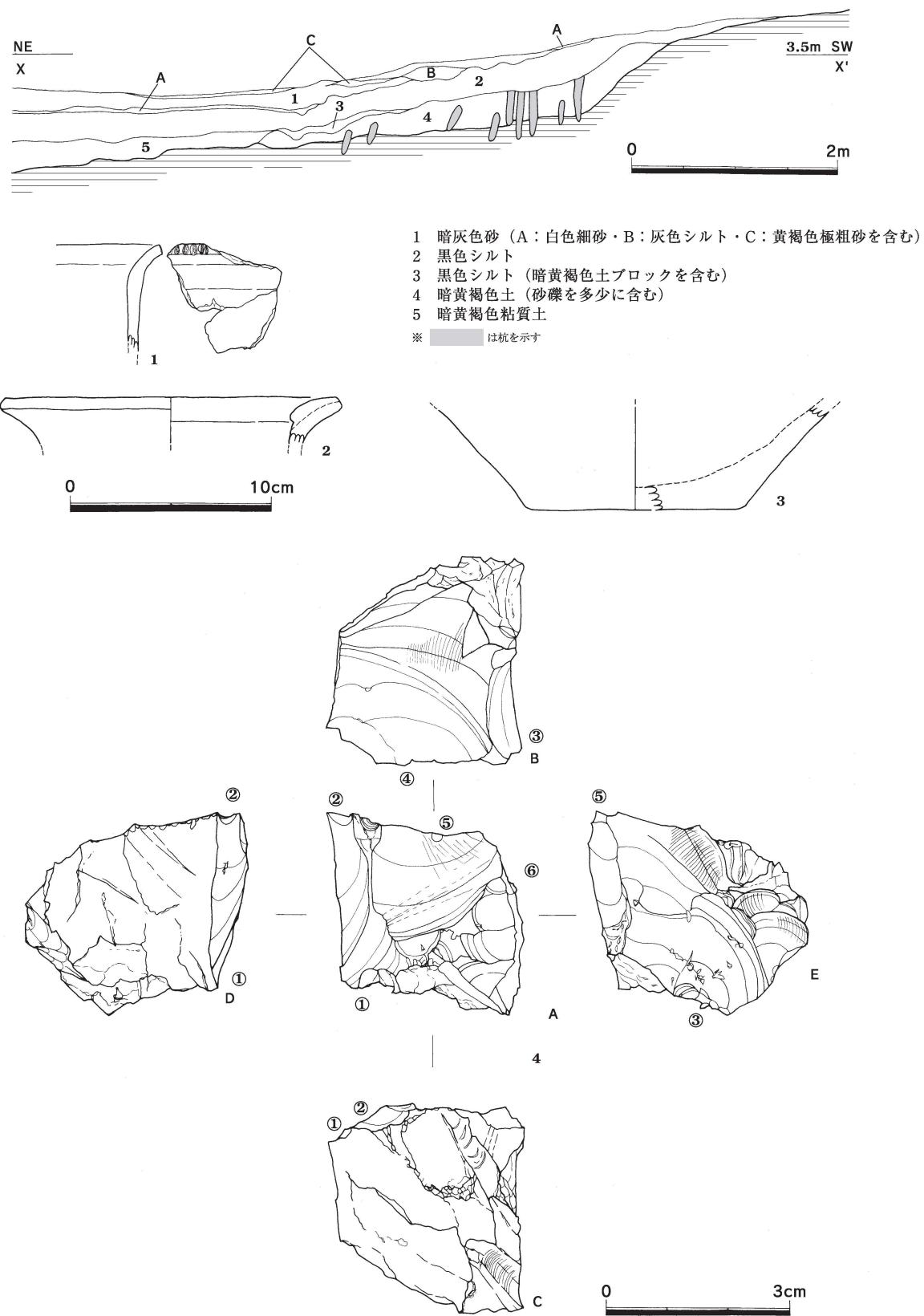
[出土遺物(第13図)]

1は弥生土器甕で、2・3は弥生土器壺である。2・3はとくに摩滅が著しく、3の内面は器面が荒れて剥離している。2は城ノ越式期のもの。4は不純物を多く含む腰岳産黒曜石製の石核である。弥生時代前期～中期初頭のものである。C面とD面に自然面を残しており、原石が角礫であったことがわかる。重量は35gをはかる。原石の大きさは5cm未満か。①→②の剥離と、③→④の剥離によって、大きさもまちまちで形も整っていない剥片を得た後、⑤の剥離を行い、最後に⑥の小さい剥片を3つ得て、石器製作を放棄している。③の剥離では大きな階段状剥離が形成されている。

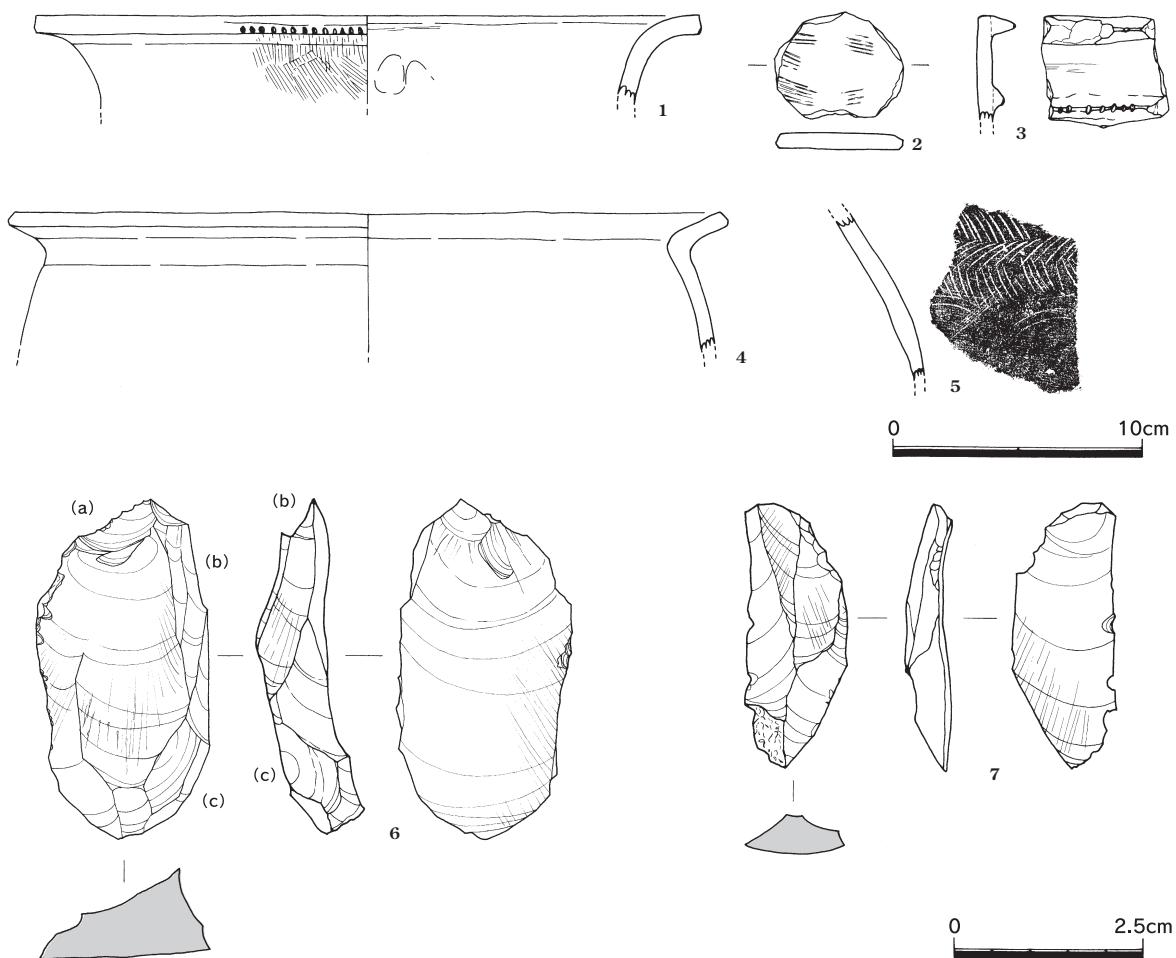
(4) そのほかの出土遺物(第14図)

1・3・5は遺構検出時に出土したものである。1・3は弥生土器甕である。1の口縁端部は面取りされ、下端にはヘラ状工具で浅い刻目がほどこされる。3は亀の甲タイプ。5は弥生土器壺で、胴部に沈線をめぐらせた後に無軸羽状文をほどこし、その下に重弧文を描く。外面には横方向のヘラミガキの痕跡が残る。4は攪乱から出土した弥生土器甕である。摩滅が著しく調整等は不明である。城ノ越式期のものか。

6はSP20から、7は遺構検出時に出土した、旧石器時代の黒曜石製剥片である。ともに遺構にともなうものではない。6は、西北九州産の黒曜石を使用した剥片で、厚さ0.9cmをはかるやや分厚いものである。左側縁に使用痕跡とみられる微細剥離が残る。背面一面と主要剥離面に対し、側面の表面風化が進み、二重パティナを呈する。新しい背面の剥離(a)は、同じ打点位置でありながら小さく先端が二股となる不整形なもので、打点位置が中軸からずれている。一方、古いパティナの剥離(b・c)は右側面と背面の一部にのこっており、母岩分割面とみられるポジ面と一方向の端正な縦長剥片剥離(b)と側縁からの石核調整剥離(c)が認められる。以上の点から想定すると、入念な石核調整をへて打面単設で縦長剥片剥離をすすめた最初の石核が放棄され、相当期間後に再度打点をずらした縦長剥片の石核として再利用されたと考えられる。打点をずらした縦長剥片は今峠型ナイフ形石器などの素材に利用されており、なんらかの関連が予測できる。7も西北九州産の黒曜石を使用した剥片である。基部をガジリで失っている。使用痕などの二次的剥離はみられない。背面には自然面と先行する同一軸の剥片剥離痕がのこるが、中央の短い剥離は剥離面調整とも考えられる。



第13図 北トレーニング・トレンチ南東壁土層断面図 (S=1/60)・出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)



第14図 そのほかの出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)

3.まとめ

本調査地点は、比恵遺跡群を構成する南・西・北の3つの台地のうちの北台地の北西端に位置しており、北台地の北限とその土地利用の在り方を確認することが期待された。調査では、調査区北半において、北西—南東方向に軸をもつ低位部への落ち際が検出され、比恵遺跡群北台地の東際のライン確定することができた。

この台地東端から西側にひろがる丘陵部では、鳥栖ローム層上面において、弥生時代前期末～中期初頭の水路SD01のほか、家畜小屋と推定される円形周溝SD13・SD24、時期不明の水利に関わる遺構SX02などを検出することができた。一方、低位部で行ったトレーニング調査からは、弥生時代前期末～中期初頭の遺物のみが少量出土し、明確な遺構を確認することはできなかった。土層観察から、調査地点では、丘陵部も低位部も、中世以降の洪水により攪乱をうけたことがわかったため、これにより低位部の遺構が削られたとも考えられる。以上のような調査成果から、時期の特定は難しいが、本調査地点は生産域として利用された可能性が高いといえる。

これまで行われてきた北台地調査成果を合わせて検討すると、本調査地点の遺構密度の薄さは、台地の上に弥生時代前期の集落域が展開し、谷部には集落域に由来する包含層が堆積するというパターンがみられる、北台地の西側谷部・中央谷部の状況とは異なっている（第4次・第25次調査など）。

このような状況は、本調査地点が比恵遺跡群のなかでも海に近く、水田経営や貯木には不向きであったためとも考えられる。本調査区の西側に続くと思われる北台地の北端においても、同じような土地利用がなされた可能性が高い。

第3章 比恵遺跡群第124次調査の記録

1. 調査の経過と体制

(1) 調査に至る経過

福岡市教育委員会文化財部は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存をはかるため、開発事業に対する事前審査を行い、開発により埋蔵文化財が失われる場合には記録保存のための緊急発掘調査を実施している。

平成23年3月9日、ビル建設に先立ち、福岡市博多区博多駅南3丁目地内の埋蔵文化財の有無について、埋蔵文化財第1課に照会がなされた（事前審査番号22-2-1123）。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号36・37-0127；遺跡略号HIE）に隣接することから、申請者宛に試掘調査の必要がある旨を回答した。その後、土地所有者の承諾を経て、平成23年4月8日に試掘調査を行い、地表下70～145cmの鳥栖ローム層上面で溝、杭列等の遺構を検出した。これを受け、埋蔵文化財第1課は、その取り扱いについて協議を行い、申請地面積353.92m²のうち88m²について、記録保存をはかることで合意した。

発掘調査は、埋蔵文化財第2課が、平成23年5月13日から同年5月24日まで実施した。調査面積は53m²。弥生土器や木製品等、コンテナ15箱分の遺物が出土した。

(2) 調査体制

調査組織は以下の通りである。

調査主体： 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括： 埋蔵文化財第2課 課長 田中壽夫
調査第1係長 米倉秀紀

調査庶務： 埋蔵文化財第1課 管理係 井上幸江

事前審査： 埋蔵文化財第1課 事前審査係 木下博文

調査担当： 埋蔵文化財第2課 調査第1係 藏富士 寛

調査作業： 伊藤美伸 小路丸嘉人 渋谷一明 薗部保壽 中村 宏 林 厚子 北条こずえ

整理作業： 大石加代子 萩本恵子

現地での発掘調査にあたっては、関係各位および地域の皆様からご理解、ご協力を賜りました。
記して感謝致します。

2. 発掘調査の記録

(1) 調査の概要

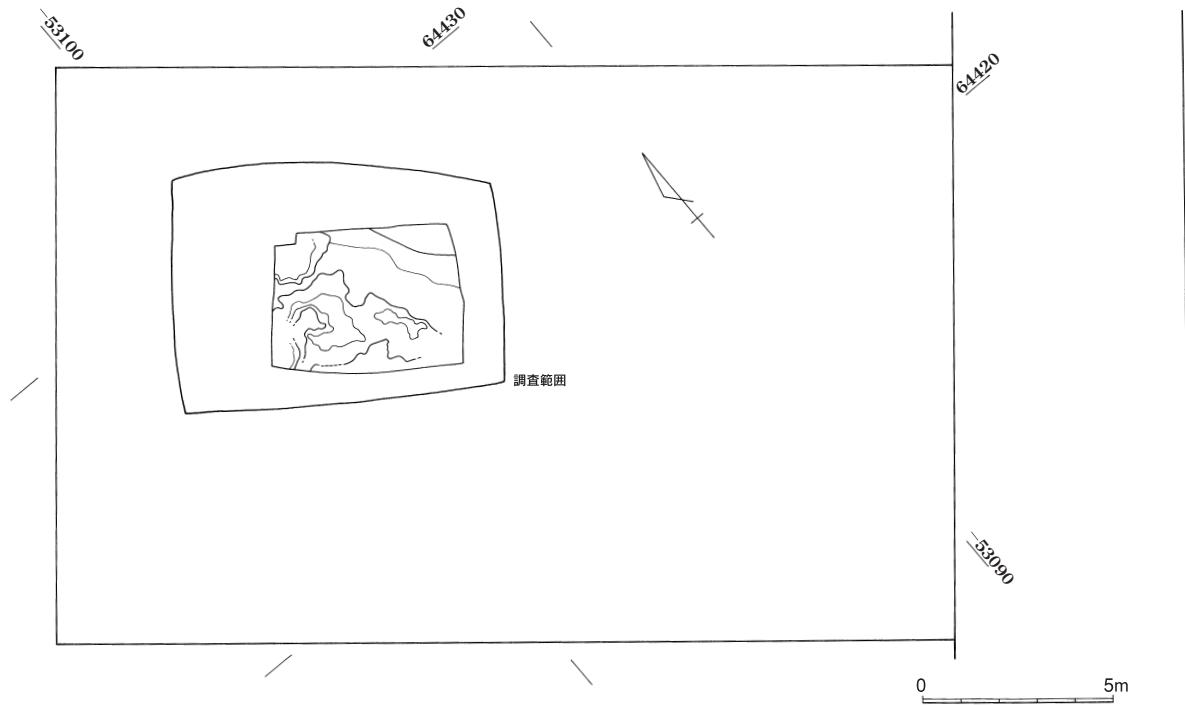
埋蔵文化財第1課が実施した試掘調査の結果によれば、調査対象地の中央に南北方向に流れる溝が確認されているが、遺構の性格や時期比定など不明な点も多く、その情報収集が今回の調査の主眼であった。現地表から遺構面までの深さが1m以上あり、地盤も軟弱で壁面の崩落が懸念されたことから、結局実際に発掘調査をなしえたのは、対象範囲88m²内の53m²であった。

調査はまず、重機による表土剥ぎより開始した。壁面に十分な安全対策を施した後、遺構の保存状況が良好な箇所を中心に、調査の対象となる鳥栖ローム土上面まで掘り下げた。その後は、湧水対策を行いながら、人力による掘削を行っている。調査の開始は平成23年5月13日。同年5月24日に全ての作業を終了した。

(2) 遺構・遺物

遺跡の状況（第15図）

調査区の全体は広く近世段階の洪水砂等で覆われている。それを掘り下げると、標高3.6m前後で遺構面（ローム上面）に達する。調査の成果として第一に、調査区の中央に北西—南東方向に走る溝を確認した（SD01）。この溝は西側掘方に護岸を施している。調査区内の土層観察（第18図）を行った際、調査区の西隅に「U」字形の落ち込みが観察された。これをSD02とする。調査区北端にも同じく落ち込みがあるが、この性格は不明である。なお、区内には2基の井戸がある。北端のものは瓦組、西端のものは桶枠であるが、期間上の都合により、いずれも調査の対象としてない。



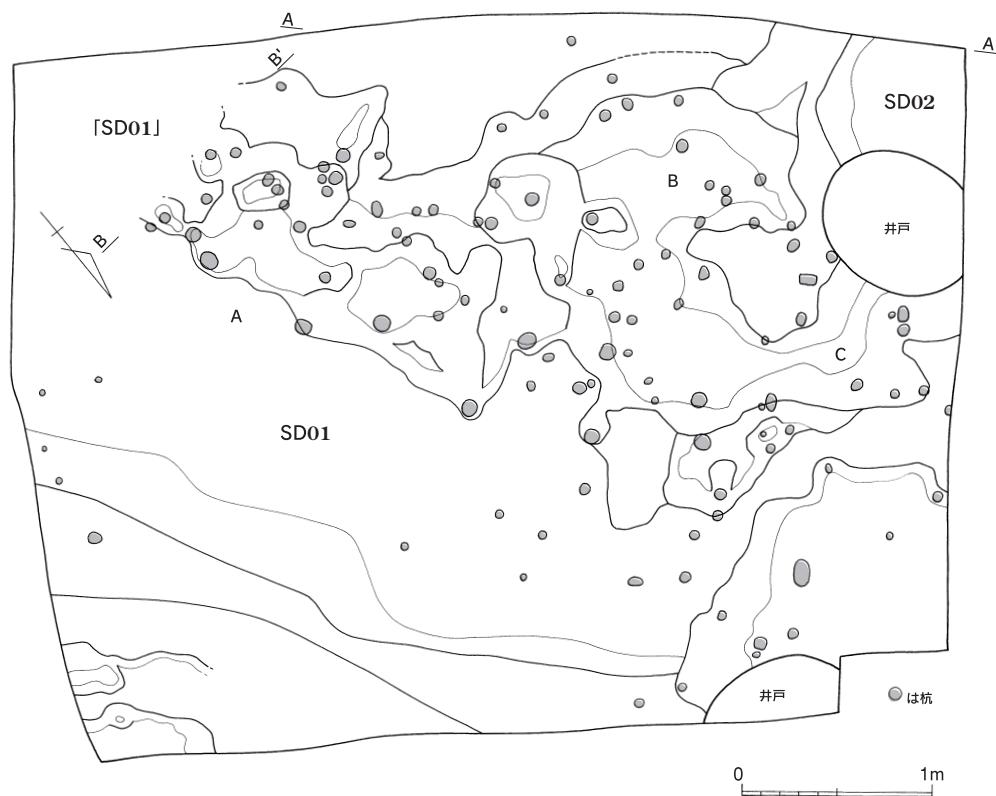
第15図 調査区位置図（1/200）

SD01 (第16~18図)

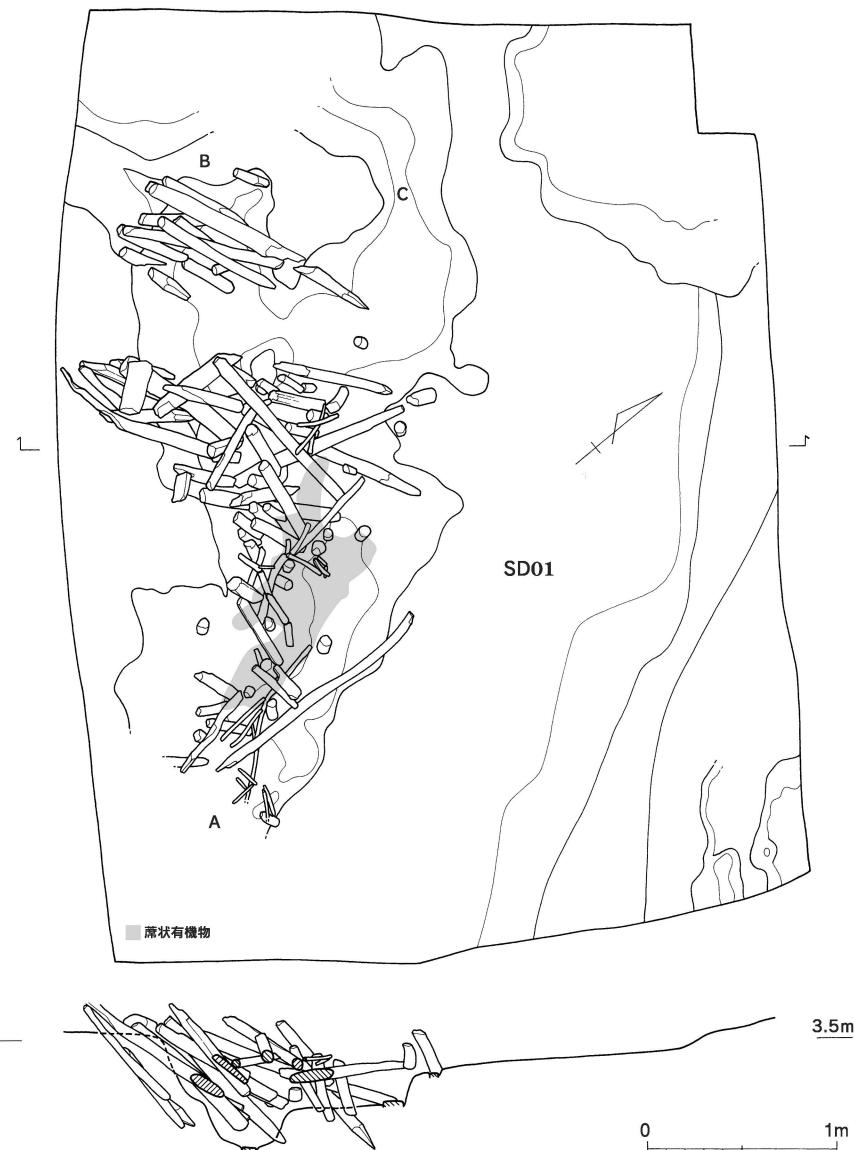
調査区の中央に、大概的には調査区の中央を北西—南東方向に流れる溝がある。幅は1m前後、深さは最深部で0.5m程を図る。平面形は複雑に入り組んでおり、底面は凹凸が多く一定ではない。これをとりあえず「SD01」と呼ぶことにしよう。「SD01」は北西半部分では2本の溝に分岐しており、ここで便宜的に、「SD01」の南東半部分を溝A、分岐した北西半の西側溝を溝B、東側溝を溝Cとする。

溝B・Cは明らかに直線を呈しておらず、その間の高所を取り巻くようにそれぞれが弧を描いているようにも思える。そうしてみると、溝Aも実は直線をなしていないことが分かる。溝Aの掘方東側の線は半ば近くで西側へ直角に折れ曲がる。西側の線も出入りが激しいが、東側に対応するかのように、大きくは西側へと傾きながらのびている。このように「SD01」は細かな屈曲を重ねながら続いているといえる。

ところで、今回の調査では、多数の杭を検出した。杭は、大きく径40~50cm前後のもの（大杭）と、20cm前後の小形のもの（小杭）に二分できる。多くのものに樹皮が残り、中にはごく少量ではあるが、大小共に面取り加工された角杭も混じっていた。そして、大杭には長さ1mを越えるものも含まれている。また、これら杭の分布をみると、多くが「SD01」の中に打ち込まれていることが分かる。大杭に限るとその全てに近い。このことから、杭、中でも大杭は「SD01」と密接な関連があるといえるだろう。検出した杭の多くは土中に残された根元の部分のみであるが、溝A・Bでは抜けて押し流された多数の杭を確認することができた（第17図）。杭は西側の高所に向かって倒れ込んでいる傾向があり、加えて溝Aにおいては、杭の間に渡された横木や、蘆状の有機物の広がりも確認できた。



第16図 遺構配置図 (1/40)



第17図 杭出土状況実測図 (1/40)

蘆状のものは、溝Aにおける杭群の表面にのみ広がっている。また、横木は枝材を用い、長さ1mを越える長いものが目立つが、残存長40～50cm程度の短いものも多い。更に小枝程度の木材も多数含まれている。

「SD01」の埋土をみると、粗砂と黒褐色シルト質土—灰細砂が主であることが分かる（図18）。明らかに水の影響を受けた堆積を示しているのだが、「SD01」の示す特徴—平面形態のいびつなや底面の凹凸—はこれが水路として機能していたのではないことを如実に示している。そこで、再びA区の大杭・横木・蘆状有機物について考えてみる。これら材料を使用した「土堤」の存在はよく知られており、福岡市域でもいくつかの発掘事例がある（山崎・荒牧編2006など）。「SD01」A・B区における大杭は「土堤」の部材として捉え、「SD01」は土堤のような構造物の痕跡として考えることはできないだろうか。そうであれば、「SD01」は溝（=SD）という名称はふさわしいものではない。大杭の状況をみれば、「土堤」は南西側の高所（地山）部分に沿って、弧を描くように存在していたと考えることができる。

「SD01」は途中で、溝B、溝Cに分岐していることは述べた。溝A-Bが「土堤」の痕跡であるならば、溝Cについても何らかの解釈が必要となる。水利上の何らかの施設がこの部分もしくは周辺に存在した可能性は十分あるが、担当者には良い考えが浮かばないため、ここでは「土堤」の改修が行われたものと解釈したい。つまり、これには溝A-Bと溝A-Cを結ぶラインがあったと仮定するもので、時間的にはA-CラインからA-Bラインへという変遷が想定できる。

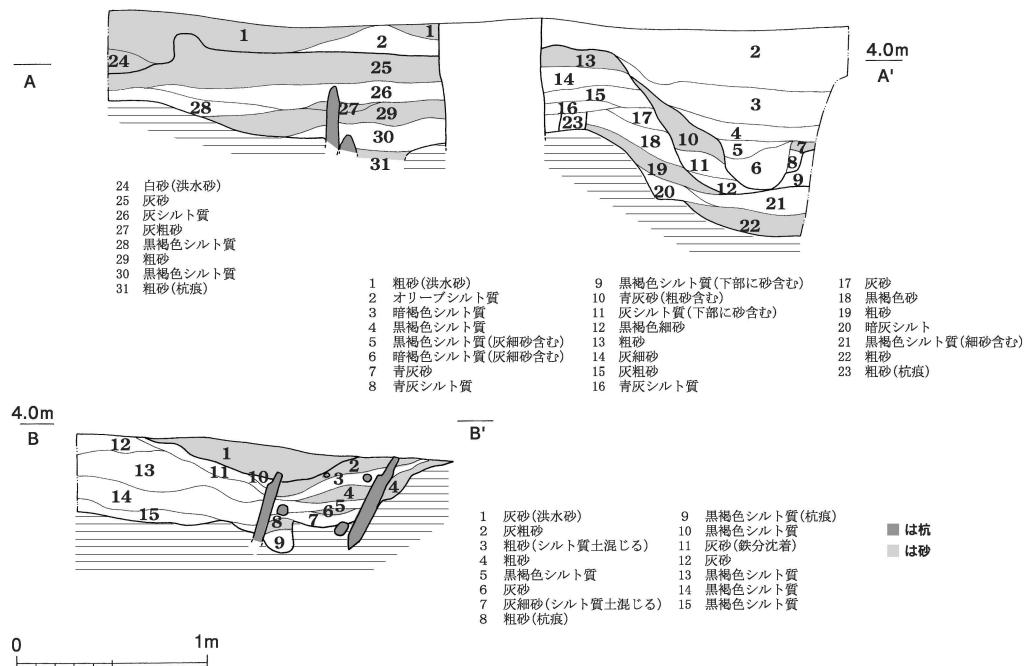
これまで、「SD01」の状況を述べ、これが「土堤」の痕跡である可能性を指摘した。更に詳しく、この「土堤」について検討してみたい。ところで「SD01」の東側は比較的平坦な地山面が1m程続いた後、高さ20cm程とごくわずかではあるが、地山の立ち上がりが認められることが分かる。この立ち上がり部分は、わずかに弧を描きながら、南東-北西方向にのびているのだが、よくみるとその曲線は「土堤」のA-Cラインと等しいことが分かる。このことに注目し、東側の地山の立ち上がりを溝の掘方と考えるならば、A-Cラインの「土堤」は、土堤というよりもその反対側の溝掘方に巡らされた護岸と呼ぶべきであろう。以上の検討から、調査区東側における地山の立ち上がりと護岸A-Cラインにはさまれた空間を溝=SD01と判断することにする。

SD01はわずかに弧を描きながら調査区中央を北西-南東方向にはしる溝で、幅1.8~2.0m、深さ0.2mを図る。西側にのみ護岸を施し、それは後に改修（A-Bライン）された可能性がある。

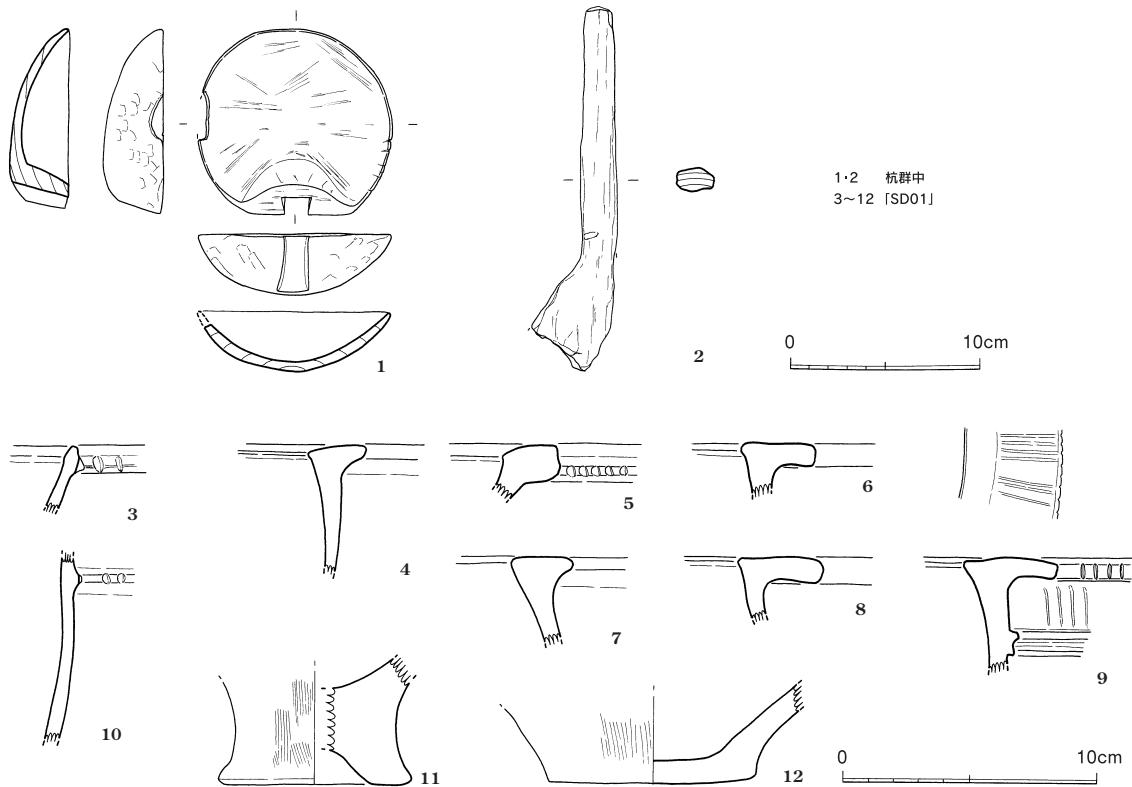
文献 山崎龍雄・荒牧宏行編2006『下月限C遺跡VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集 福岡市教育委員会

SD02 (第16~18図)

調査区北西隅部で確認した溝で、調査区内にその一部が存在するのみである。これは当初、「SD01」の一部と認識して調査をおこなっており、土層の断面観察（第18図）を確認して初めて、その存在に気付いた。断面を観察すれば少なくとも2回の掘り直しが行われている。内部には、粗砂やシルト質土が堆積しており、水路として機能していたのだろう。



第18図 土層図 (1/40)



第19図 出土遺物実測図 (1/3 · 1/4)

3.まとめ

これまで、今次調査の主要遺構であるSD01・02について述べた。ここでは、これ等溝の時期、そして隣接する第121次調査との関係について所見を述べ、まとめに替えたい。

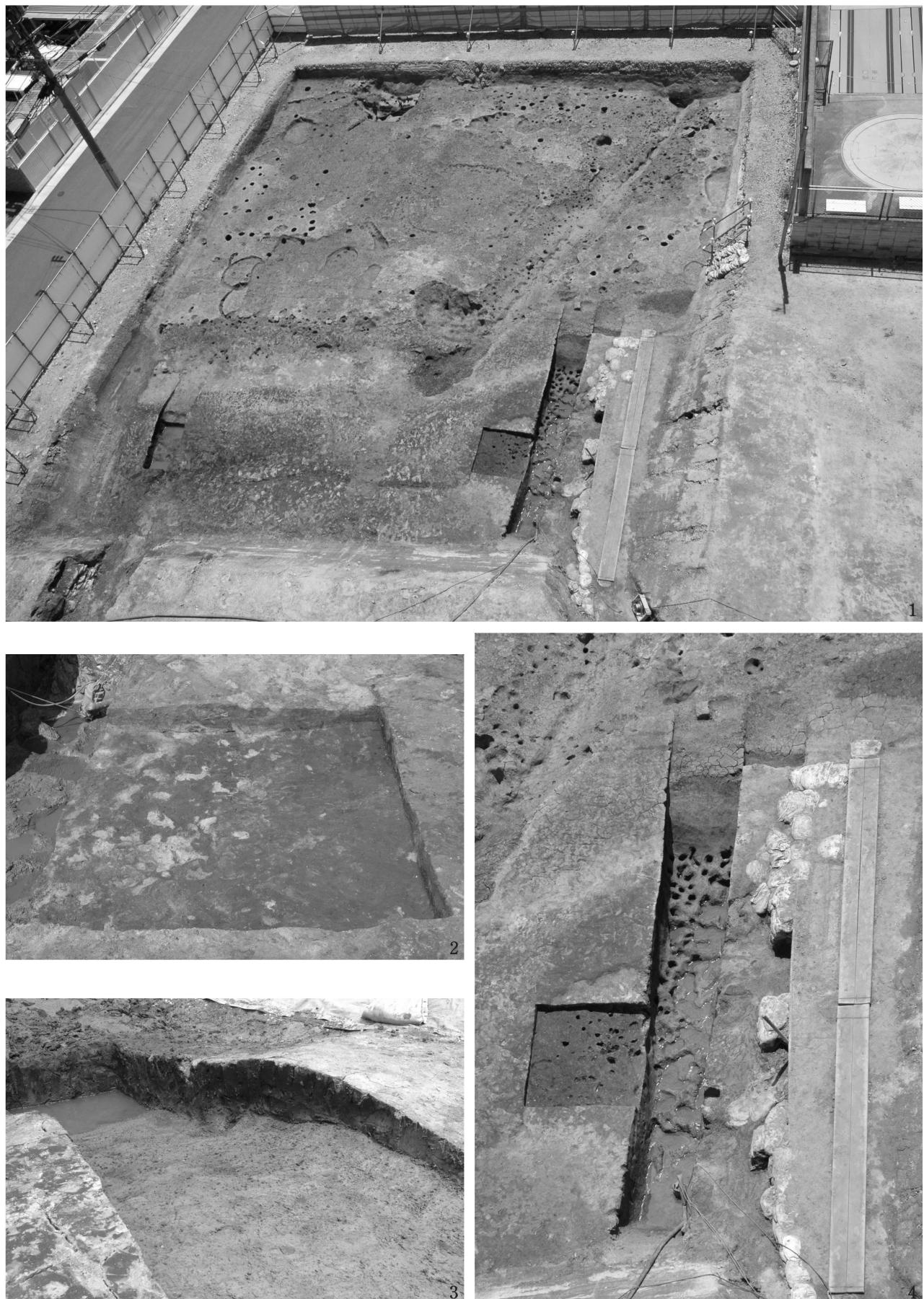
今次調査の出土遺物は、SD01の木組みの中から木器（2点）と護岸底面の凹部（「SD01」）出土の土器が全てである（第19図）。出土した土器はすべて弥生土器で、前期～中期後半を中心とする。ここで注目すべきは、木組みの中から出土した杓子（1）であろう。これは身の部分で、付根に断面逆台形の切り込みを入れ、柄と組み合わせる。このような組接の杓子が、土器の示す弥生時代中期後半までに存在する可能性は低いと判断し、ここでは、大概ではあるがSD01を近世の洪水砂が遺跡を覆う以前、つまり中～近世段階の遺構として捉えておくことにしたい。該期の弥生土器は第121次調査でも数多く出土しており、凹部出土の土器は混入品とみなすことになる。

SD02は、部分的に確認したのみで、SD01との切り合い関係等、不明な点が多い。第121次調査のSD01は調査区を東西方向に流れる溝であるが、わずかに弧を描いて、今次調査区の方向にのびており、担当者はこの両者が同一の溝になる可能性を考えている。ちなみに第121次調査SD01は弥生時代前期末～中期初頭に位置づけられており（第2章2-(2) 参照）、同一になるのであれば、対応するのはSD02最下層の掘り込み部分であろう。

地形をみれば、SD01は台地の縁辺部を台地に沿って巡る溝であるといえる。時期も特定できないが、しいて関連遺構を挙げるならば、第121次調査SX02であろうか。このような水田経営などに係わる水利関係の遺構は、小規模な考古学的調査だけでは限界がある。特に中世以降の遺構であれば、広く文献史上の成果などを援用し、歴史的景観の復元に努める必要があるだろう。自らの反省の意も込めて、今後の課題としたい。

図 版

図版 1

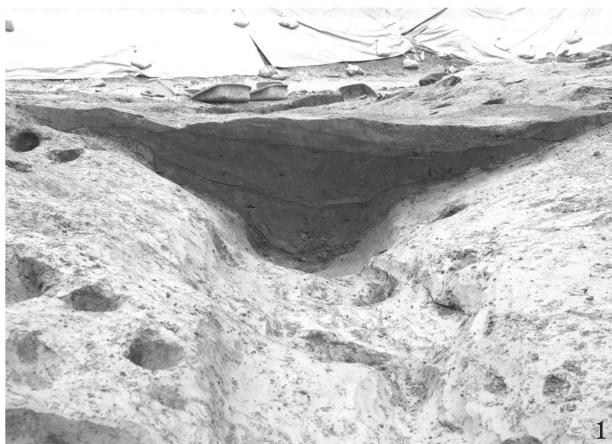


1 調査区全景（北東から）

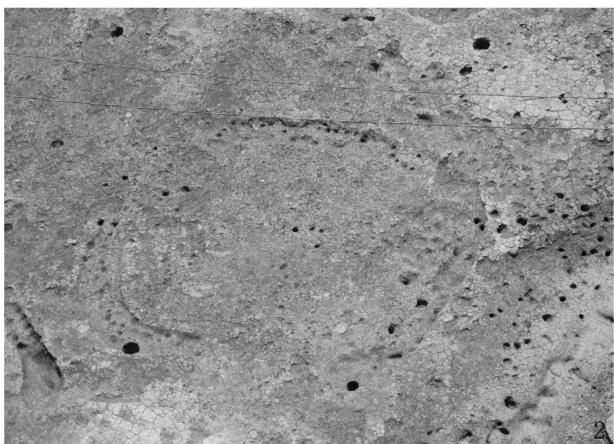
2 北トレンチ拡張部（南西から）

3 低位部南トレンチ（西から）

4 北トレンチ（北東から）



1



2



3



4



5



6



7



8

- 1 SD01土層（西から）
- 3 SX02・SD03（北東から）
- 5 SD13・24（北西から）
- 7 北トレンチ南東壁土層 東端（北西から）

- 2 SX07（北東から）
- 4 SX02（北東から）
- 6 北トレンチ南壁土層（北から）
- 8 北トレンチ南東壁土層 西端（北西から）

図版 3



調査区全景 1 (東から)



調査区全景 2 (北東から)



調査区全景 3 (北から)



杭等検出状況 1 (南から)



杭等検出状況 2 (北東から)



杭等検出状況 3 (北から)

図版 5



大杭出土状況 1 (北東から)



大杭出土状況 2 (南西から)



大杭出土状況 3 (南から)



報告書抄録

ふりがな	ひえろくじゅうさん							
書名	比恵63							
副書名	比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1169集							
編著者名	藏富士寛・松尾奈緒子							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL092-711-4667							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
比恵遺跡群 第121次調査	福岡市博多区 博多駅南3丁目	40132	0127	36° 34' 56"	137° 54' 13"	20100710 ～ 20100810	360	記録保存 調査
比恵遺跡群 第124次調査	福岡市博多区 博多駅南3丁目	40132	0127	36° 34' 54"	137° 54' 12"	20110513 ～ 20110524	53	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
比恵遺跡群 第121次調査	集落	弥生時代	弥生時代—溝・円形周溝 土坑・柱穴 時期不明—性格不明遺構	弥生土器 磨製石器 打製石器				
比恵遺跡群 第124次調査	集落	弥生時代 中・近世	時期不明—溝・杭列	弥生土器 木器				
要約	<p>福岡平野には、河川開析をうけて島状となった洪積台地が、平野を縦断するように南北に長く広がっております。弥生時代以来、福岡平野の人々の重要な生活の場となってきた。比恵遺跡群は福岡平野の中央部にあり、このような島状台地群の北端に立地する。本調査地点は、比恵遺跡群を構成する南・西・北の3つの台地のうちの北台地の北西端に位置しており、北台地の北限とその土地利用の在り方を確認することが期待された。</p> <p>第121次調査では、調査区北半において、北西—南東方向に軸をもつ低位部への落ち際が検出され、比恵遺跡群北台地の東際のライン確定することができた。この台地東端から西側にひろがる台地部では、鳥栖ローム層上面において、弥生時代前期末～中期初頭の水路のほか、家畜小屋としての利用が想定されている円形周溝、水利に関わる遺構の可能性が高い性格不明遺構などを検出することができた。その一方で、低位部で行ったトレンチ調査では、水田遺構などの同時期とおもわれる明確な遺構を確認することはできなかった。第121次調査・第124次調査では、丘陵部・低位部とともに、中世以降たびたび洪水におそわれており、これにより、遺構面の上に堆積していた耕作土や遺構の上層が削りとらわれているため、低位部に存在した遺構が失われたと考えられる。時期の特定は難しいが、本調査地点は、生産域として利用されていた可能性が高い。</p> <p>第124次調査は第121次調査の南西側隣接において実施した。そして、杭列を伴う溝状遺構を検出している。溝埋土からは前期～中期後半までの弥生土器が出土しているが、溝状遺構の所属時期は不明。これは護岸など水利に関連する遺構である可能性が高い。</p>							

ひ え 比 恵 63

—比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1169集

2012(平成24)年3月16日発行

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8番1号
 (092) 711-4667

印刷 株式会社 宣巧社
 福岡市博多区吉塚8丁目7番30号
 (092) 622-0555